



排除ではなく包摂を

弁護士 上杉 崇子



2019年から取り組んでいる「結婚の自由をすべての人に訴訟」は、全国6訴訟すべての高裁判決が出揃い、早ければ今年中に最高裁判決が出されます。2015年に日本弁護士連合会に申し立てた同性婚を求める人権救済申立てでは、約4年を要して同性婚を認めない現行法は憲法違反との意見が出されました。それからさらに年月は過ぎ、日本社会は着実に同性カップルの婚姻の受容に向かって進み、司法もそれに呼応するように6高裁のうち5高裁が明確な違憲判決を下しています。

憲法24条は2項で婚姻と家族に関する法律は「個人の尊厳と両性の本質的平等」に立脚しなければならないと国会に命じています。「個人の尊厳」とは全体を構成する個人にこそ価値の根源があるという憲法の根本原理であり、個人より集団を重視して全体主義に陥った戦前の価値観に対する反省が背景にあります。

男性優位・女性蔑視の社会通念が色濃い戦後の社会状況の中で、憲法は個人の尊厳の原理のもと、14条で男女平等を定め、24条で女性に男性と等しく婚姻の自由を保障しました。性的指向及び性自認にかかわらず個人は等しく尊重されるとの理念が共有された今日、同性カップルを異性カップルと等しく婚姻制度に包摂することを憲法は要請するというのが個人の尊厳の原理に適った自然な解釈です。

憲法が保障するのは多様な個人がありのままに尊重される社会。排除ではなく包摂のためにしつこく声を上げ続けます。



研修会

「不当要求およびカスハラに
対する企業対応等」と従業員
の守り方（公益通報者保護制度含む）

弁護士 佐々木 学



先日、私の所属する弁護士会の民事介入暴力対策委員会から派遣される形で、標題のテーマで研修会の講師役を務めて

きました。派遣された先は、都内の城南地区にある特防協という団体（暴力団や反社などの対策をする地区の事業者の集まり）でした。テーマの設定は、特防協側からのリクエストによるものです。参加者は、大手企業の総務部に勤務する方々を中心に20名程度でした。

当日の研修会では、冒頭に、地区の警察署で暴力団や反社対策をする部署に所属する警察官の方から、最近の組織犯罪の傾向と管内の情勢について、30分程度お話をいただきました。

次いで、私の方で事前に用意したスライ

「結婚の自由を すべての人に」訴訟

弁護士 佐藤 真依子



昨年11月28日、当事務所の上杉弁護士、藤井弁護士及び私が代理人を務める「結婚の自由をすべての人に」訴訟（東京2次

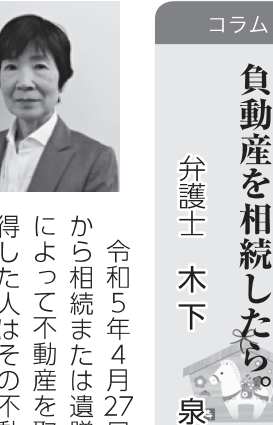
訴訟）の判決期日が東京高等裁判所で開かれました。一昨年10月30日の東京高裁判決を含め、これまで5つの高裁が現行の法制度を違憲と判断してきましたが、今回の東京高裁判決は、憲法14条1項、24条1項および2項に反しないと結論づけました。

本判決は、「二の夫婦とその間の子」からなる家族を保護することが合理的であると繰り返し述べますが、法律上同性カップルを婚姻制度から排除することの正当性について、説得的な理由を示していません。憲法前文の「われらとわれらの

子孫のために」を引用しつつ、「男女の性的結合による子の生殖こそが通常である」と指摘する点は、同性カップルのみならず、養子、生殖補助医療による子、ステップファミリーや子をもたないカップルなど、嫡出子を共に育てる夫婦以外の多様な家族が社会を構成している現実を無視するもので、到底容認できません。

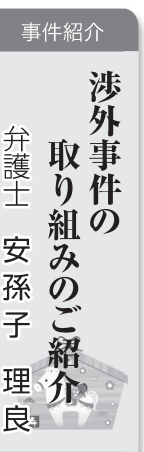
判決後、本件を最高裁へ上告しました。今後は他地域の上告事件と併せ、裁判官15名による大法廷で審理される見込みです。最高裁は、これまでの判例を踏まえつつ、法律上同性カップルが被る不利益や、その家庭で育つ子どもたちの現状を丁寧に評価し、明確な違憲判断をもって国会に立法を促すべきです。

今年もよろしく お願い申し上げます 2026年1月 TOKYO大樹法律事務所 所員一同



令和5年4月27日から相続または遺贈によって不動産を取得した人はその不動産を国に引き取ってもらうことができる

ようになりました。これを相続土地国庫帰属制度と言います。この制度が始まる前は、相続した遠方の利用できない土地を放置し、代々相続が発生することに所有者（相続人）がどんどん増えていき、管理不全で所有者が判らない土地になってしまうということが社会問題となっていました。このような問題土地の発生を抑制するために制定されたのがこの制度です。相続または遺贈により土地を取得した人がこの制度を利用するためには国庫帰属の承認を申請する必要があります。承認を得るためには建物が存在しないこと。担保権や使用収益権の設定がないこと。通路その他、他人による使用が予定されていないこと。有害物質に汚染されていないこと。境界が明らかで所有権について争いがないこと。などの要件をクリアすることが必要です。その他、通常の管理または処分をするに当たり過大な費用または労力を要する土地だと不許可になります。そしてこのようなハードルの高い要件をクリアした場合に一定の負担金を国に支払ってやっと国庫帰属できることとなります。負担金額は法務省によると市街化区域内の宅地で200㎡を越えて400㎡以下の場合1平米あたり



渉外事件の 取り組みのご紹介

弁護士 安孫子 理良



当事務所では、私と佐藤弁護士が、英語も対応言語として、弁護士業務を行っています。そのため、英語圏の相談者から直接英語で法律相談のお申込みを受けています。また、日本の方からのご相談でも、相手方との対応や当事者同士のやり取りが英語であるケースも多くあります。

当事務所所内で取り扱っている渉外事件は、大半が個人を当事者とする案件で、家事事件では離婚事件、認知事件、相続事件などがあり、民事事件では、労働事件や交通事故等の損害賠償請求事件が中心です。私自身でいえば、全体の3〜4割は何らか国際的な要素を含む事件を担当しています。

2250円に343,000円を加えた金額とされています。たとえば210平米の土地だとすると総額約81万円の費用を支払うこととなります。それ以外に隣接地との境界を確認する必要がある場合はその費用もかかります。ですので、不要な土地を相続した場合国庫に引き取ってもら

ドを画面に写しながら、お話ししました。

最初は、不当要求とカスハラ対応のテーマについて、具体的な事例を念頭に置きながら、当方に落ち度がない場合には、組織的に、毅然と、外部の専門家らと連携をしながら対応する必要があることなどをお伝えしました。次に、従業員の守り方のテーマについては、会社が従業員に対して安全配慮義務を負っていることを前提に、マニュアルを作成しておくことが有用なことや、担当者を孤立させないことが重要なことをお伝えしました。最後に、反社勢力との関係断絶に触れつつ、リクエストがあった公益通報者保護制度についても、お話ししました。公益通報者保護制度については、「会社が反社に利益供与を繰り返していた事実を知った従業員が、週刊誌にその事実を内部告発し

アカデミー賞予想と 多様性の時代

弁護士 藤井 啓輔



私の趣味の一つは映画鑑賞ですが、ここ数年は派生的な趣味としてアカデミー賞の受賞予想も楽しんでいきます。

アカデミー賞は、「アメリカ映画の祭典」とも呼ばれており、その年1年以内にロサンゼルス地区で上映された映画のなかから、映画芸術科学アカデミーの会員達（その多くはハリウッドに拠点をもち映画業界人たち）の無記名投票によって受賞者・受賞作品等が決定される仕事

ことを契機に生じた所謂「白すぎるオスカ」問題に端を発して、映画芸術科学アカデミーは会員数を大幅に増やすことを決定、「有色人種と女性の会員数を2020年までにそれぞれ2倍にする」との公約も達成し、会員の多様化はアカデミー賞でスポットの当たる俳優や作品の多様化も一定程度促進しました。こうした多様化の流れには、選考者の

今回は、この渉外事件で問題となる国際裁判管轄と準拠法についてご紹介いたします。

渉外事件では、最初に国際裁判管轄が問題になります。その事件を、日本の裁判所で取り扱うかという問題です。民事訴訟法や人事訴訟法に明文の規定がありません。もっとも、複数の国に管轄のあるケースもあり、そのような事案では、どの国の裁判所でその事件を取り扱うのが現実的か、また依頼者にとって利益になるかを考える必要があります。また明文の規定では日本の国際裁判管轄が認められない案件でも、それが衡平に反する事案では、緊急管轄を主張することがあり、実際に緊急管轄が認められた経験もあります。渉外事件の法律相談では、管轄についてご説明することで、置かれた状況が明確になるケースも多くあります。次に問題になるのが準拠法です。どの

うにはかなり難しいことが判ります。最近、このような不要な土地をお金をもらって引き取る業者が出てきています。この引き取り業には事業免許が必要ないの業者は玉石混濁です。国庫帰属のハードルが高いからと引き取り業者に依頼する場合十分注意する必要があります。



たところ、会社から解雇された」という事例を設定してお話ししました。その中で、（公益通報者保護法の要件を充たす限り）内部通報を理由とした解雇が無効になること、最近の法改正で、公益通報を理由として解雇や懲戒をした事業者側に対する罰則が新設されるなど、その内容が強化されたことなどに触れました。

私の話は、予定を少しオーバーして、1時間15分程度になりましたが、研修会の終わりに、参加された方々から、幾つもの質問をいただきました。

最後に、当日参加された皆様、私の拙い講義をご静聴くださり、ありがとうございました。この場を借りて、御礼申し上げます。

組みです。

「ハリウッドの業界人たちが主な選考者である映画賞」と聞くと、「そんな内輪で選考した賞の予想をして面白いの？」という疑問をもたれる気もしますが、エントメ王国アメリカの業界人たちが賞を与える作品は、相応に面白く心動かされる作品が多く（そうでない作品もあるにはあります）、映画好きとしては軽視できない訳です。

また、「内輪の祭典」としての性質にも、近年変化が起きつつあります。

例えば、2012年にロサンゼルス・タイムズ紙によって当時約6000名いたアカデミー会員の構成が高齢の白人男性に偏っていることがスクープされたことや、2015年と2016年の俳優部門の候補者が2年連続して白人のみで構成された

属性から受賞作品のパターン化を図ることを困難にするという意味で「予想屋泣かせ」な面もありますが、それもエンタメ大国アメリカが世界に届ける映画の祭典が、限られた属性の人たちのお祭りではなく、広く多くの人々の心に訴えるものに変わっていくことの大切さに比べれば些細なこと。予想の難しさも含めて、来年の授賞式が楽しみです。

国の法律が適用になるかという問題です。日本に裁判管轄のある事案では、法の適用に関する通則法等の法律と、民事では契約書の記載で準拠法を確認します。法律相談の中には、海外に管轄のある案件だけでも、日本法が適用になることから、日本法について助言を求められるケースもあり、意見書を作成することもあります。日本でも、例えば外国人夫婦の離婚事件など、外国法が適用になる事案が一定数あります。特に離婚事件では、夫婦関係と親子関係で適用法が異なるケースもあります。夫婦関係、親子関係という法律関係ごとに整理して適用法を考えることは、渉外事件特有の思考になります。ここ数年でもアメリカの州、パングラデッシュ、ガーナの法律が適用になる事案がありました。このような事案では、弁護士がその国の法律を調査、翻訳して、裁判所に法律について説明をしなければならず、インターネット、文献調査で不足する場合には、その国の弁護士に協力を求める場合もあります。他にも渉外事件特有の配慮事項は多くあります。当事務所では、多くの案件で、複数名の弁護士で共同受任をし、意見交換をしながら、対応にあたっています。



知識は資本？

弁護士 近藤 博徳



例えば、漢字。小学生の頃は覚えるのに苦労しましたが、今はそんなに苦痛に感じません。英語も、得意ではないけれど、スペルを覚えるのは以前ほど大変ではない。商売道具である法律も似たような感じで、得意な分野やなじみのある分野の知識はどんどん入ってきて、結構簡単に定着していくので、覚えることにそれほど苦労はしません。でも、初めて触れる法律だったり、普段余り接点のない法ジャンルだと全く勝手が違います。本を読んでもなかなか知識が定着しない。一生懸命考えて理解しようとしながら読んでいても、ちょっとよそ見をしてしまうと、途端に自分の理解があやふやになってしまいます。感覚的に言うならば、「ぱっと振り返った拍子に頭から知識がぱらぱらとこぼれ落ちてしまう」ような感じです。

既知の分野で新しい情報を吸収するとき、その新しい情報が既存の知識と結びついて、知識体系の中であるべき場所に収まるようなイメージがあります。結晶の塊にさらに結晶が張り付いて大きくなっていくイメージです。そうすると、新しい知識はあるべき場所にちゃんとあって、いつでもアクセスできます。それに対して、未知の分野の情報は、それぞれがバラバラに地面に転がっている感じで、なかなか全体をまとめた知識として理解することが難しく、いつも気にしていないとどこかに転がっていつか消えてしまうようなイメージです。

知識のあるところには知識がさらに定着し、知識が膨らんでいく。知識の無いところには知識が定着せず、知識は貧しいまま。まるで冷徹な資本主義の原理のようで、ひしひしと感じました。ああ、だから僕はいつまで経っても身に付かないんだな、と。

Lawyers column

司法研修所のクラス会に参加して

弁護士 村田 智子



昨年10月、司法研修所のクラス会に参加しました。司法研修所を卒業したのは約30年前でした。

司法試験に合格した年齢にばらつきがあるため、クラスメートの年齢層は50歳代前半から60歳代までと差があるのですが、私も含め、皆、それぞれに歳を重ねていました。

驚いたのは、私より少しだけ年上で、裁判官や検事に任官したクラスメートが、すでに定年を迎え、弁護士など別の道に進んでいたこと。弁護士をしていると気づきませんが、私も人生の区切りとなる年齢を迎えているのだと実感しました。

弁護士となったクラスメートの仕事や生き様も様々で、企業法務中心の人、金融の分野でエキスパートになっている人もいれば、私のように「町弁」として様々な相談を受けている人もいました。

WEBでの裁判が当たり前になり、裁判所も裁判官・検事、弁護士という法曹三者の在り方も私たちが新人の頃とは様変わりしています。

それでも、一人ひとり、自分らしく仕事をし、生活しながら、まだまだ現役としてがんばっているクラスメートの姿を見て、私も頑張ろうと思いつつ、帰途につきました。



事務局 ちよひつひつ

▼従姉に昔飼っていた猫の人形を羊毛フェルトで作ってもらいました。まるで生きているかのようにとてもリアルで、手で触れて撫でることができるので心が和みます。また折々に制作途中の写真をもらい、瞳や肉球の色や形など細かく意見を求められ、あの子の瞳はもっとオリーブが入っていた、全体的にもっと丸かったなど、改めて思い返す懐かしさ温かい時間もまた、贈り物のひとつであったように思えました。

(オ)
▼息子の小学校でSNSをめぐるとトラブルがあったようで、先生から注意があったと教えてくれました。善意から起こった行き違いだったようですが、その内容がまさに最近私の身に起き、モヤッとしていたことと同じだったのです。

辛い息子はまだSNSは利用しておらず、私の方もトラブルにまでは至らなかったのですが、大人でも難しいSNSのルールやマナー。ネットリテラシーをどのように高め、関わり方を線引きしていくか、悩ましいです。

編集後記

ここ数年四季を感じづらくなってきましたが、この「大樹」の作成が始まって冬が来たのだと感じました。最近は一季化しているとも言われているので、今後体感ではなく行事で季節を感じるようになるのでしょうか。

(エ)



ホームページはこちらです。
<https://www.tokyotaiju.com/>



◆アクセス：地下鉄丸ノ内線「新宿御苑前」駅 2番出口 徒歩5分
 都営バス「花園町」下車 徒歩3分